



マッセ・市民セミナー（NPO法人ちゃいるどネット大阪共催）

**「乳児期の発達と生活・あそび  
～人間としての基礎、自我のめばえ～」**

開催日：平成27年7月28日（火）

会 場：田尻町総合保健福祉センター 4階研修室



## 「乳児期の発達と生活・あそび

### ～人間としての基礎、自我のめばえ～

長瀬 美子 氏

（大阪大谷大学教育学部 教授）

3

#### はじめに

幼稚園の先生方は1学期が終わって一段落されている一方、保育園や保育所の先生方はいよいよ夏の本格的な遊びに向けて、子どもたちとたっぷり過ごしていってほしいと思います。

乳児期を考えることは、その先の幼児期、健やかな就学に向けて、少し長い目で見ていくための土台を一緒に考えていくことにつながると思います。今日は「乳児期の発達と生活・あそび」というテーマで、特に二つのことを中心にお話したいと思います。

一つは、乳児期は70～80年の長い人生を人間らしく生きていくための基礎の時期であり、人間としての基礎をつくる時期であることから、その人間らしい基礎を保育の中でどうつくっていくのかという話です。もう一つは、自我が芽生えて、自我を豊かに太らせていく大事な時期であるということです。

いやいやが出たり、駄々をこねたりする時期でもありますが、その時期をどう理解して、豊かな「その子らしさ」につなげていくか。そして、「その子らしさ」というのは決して他人と一緒にできないことではなく、みんなと一緒に過ごす中で、良さを発揮したり、苦手なところをお互いに補い合ったりするような、それぞれの自我が豊かに太っていくような生活を乳児期にどう保障していくのが、今、大きな課題になっていると思います。

また、家庭の生活が多様化している中で、途中入所・入園した方が家庭と園生活のギャップによって、うまくランディングできないことも増えてきています。だからこそ、乳児期とはどんな時期なのか、その時期にふさわしい生活の仕方と遊びはどういうものなのかについて、いま一度共有し、明日からの教育・保育につなげていただければと思います。

## I 「発達を学ぶ」ということ

乳児期に限定せず、発達を学ぶということは、各年齢の特性をしっかりと理解することを通して、日々見通しを持った保育ができることだと思います。この時期はこういう時期なのだと思えるからこそ、この先にどうなっていくのか、何の土台の上に発展している姿なのか、見通しを持った保育ができるということです。だからこそ、焦ったり、急がせたりすることなく、大切にしたいことには丁寧にも時間も手間も掛けて関わるすることができます。子どもが大人の助けも借りながら課題を乗り越えていく手助けを、時間を掛けてしっかりとできます。各年齢の特性を理解することで、見通しのある保育と、そうあるべきところに時間と手間を安心して掛けることができます。そういう保育者の安心につながっていただきたいと思います。

発達とは決して直線に進むわけではなく、子どもの中には自分で思っている「なりたい自分」と「自信のない自分」の両方が存在しています。時折、ともなりたい自分、自信のある自分が前に出て積極的になる日もあれば、時として自信のない自分が前に出て、少し消極的になってしまったり、戸惑ってしまったりすることもあります。大人と同じく、子どももそうなのだと思います。二つの自分の間で揺れながらも前に進んでいくことが、発達だと思います。

そう考えると、私たち大人がすべきことははっきりしています。自信のない自分が否定されることなく、「そういう日もあるよね」「やりたくない日もあるよね」「自信がなくなるときもあるよね」と、大好きな誰かにきちんと受け止めてもらえること、そして、一方でなりたい自分が見えにくくなってしまふときもあるわけですが、その子の中にはしっかり存在しているので、「かわいそうね」「大変ね」で終わらず、なりたい自分に向けてまた一歩ずつ前に進んでいくことができるように、受け止め、励ましながらか、前に進んでいくことを一緒に応援する。それが大人の大事な役割、発達に関わる者の役割ではないかと思っています。

竹馬に乗れた、絵を描くことができた、鉄棒ができた。何かをできたということは、素晴らしいことです。子どもにとってもうれしいし、関わってきた大人にとってもうれしいことです。しかし、否定するわけではないのですが、できた瞬間が発達ではなく、そのずっと前、そのことをやってみたくと思ったときから子どもの発達は始まっていると私は考えています。

保育所にお勤めの先生はよくご存じだと思いますが、4歳児は5歳児の姿を常に憧れを持って見て、「来年は自分があれをするのだ」と思います。4歳児だけでなく、何でもやりたがりの2歳児も、やってみたくて憧れる気持ちを持っています。4歳児の中に5歳児への憧れが生まれたときも発達だと思いますが、いろいろなことをやってみたくて思っている2歳児たちが、いつかはあんなふうになりたいと思うことも、大きな発達ではないかと思います。お兄ちゃん、お姉ちゃんがやっていたようにかっこいい姿をクラスでまともまてできるのは、3年後かもしれません。でも、その姿に憧れ、いつか自分があんなふうになりたいと思ったときから、子どもたちの発達は始まっていると思います。

しかし、それは残念ながら私たちには見えません。何かサインがあって気持ちが芽生えたことが分かればすぐに見つけられるのですが、そういう気持ちが生まれたことは、よほどよく見ていかなければ分かりません。この「やってみたくて」という気持ちがある子に芽生えたところから、私たち大人が大切にしていって、そばに寄り添いながら、時には励ましたり、導いたりして、「あんなふうな姿になってみたい」「あんなお兄ちゃん、お姉ちゃんになりたい」という思いをかなえる手伝いをする。それが発達に関わる者の大事な役割だと思います。

このように、何歳で何ができるかだけでなく、そのできた姿の何年も前から子どもたちが思いをため、憧れを持ち、挑戦していく姿を含めて、子どもたちの発達と見ていきたいのです。そして、結果が出るのは幼児期になってから、小学生になってから、思春期になってから、もしかすると大人になってからかもしれません。結果が出るのはずっと先かもしれませんが、そのずっと先の素晴らしい姿につながる豊かな土台を乳児期にしっかりつくることを、今日、一緒に学べればと思います。

## Ⅱ 「人間としての基礎」を育てる—0歳児期の重要性

### 1. 「人間としての基礎」とは

0歳児期の重要性とは、0歳の時期だけではなく、0歳のときから丁寧に取り組んでいく、0歳児期をスタートとしての課題と考えていただければと思います。0歳も1歳も2歳も、いろいろな意味で基礎だとは思っているのですが、私は一年一年が同じ意味合いの基礎ではなくて、少しずつ意味も違うのではな

いかと考えています。0歳は本当に人間としての基礎、1歳は個人としての基礎だと思います。一人ひとりのその子らしさが、いよいよ本格的に花開いてくるときです。2歳は集団の中の自分として、これから豊かに生きていくための基礎の時期だと思います。今日は0～1歳の話が中心になりますが、まずは人間としての基礎についてお話しします。

人間としての基礎の段階で、最も基本的な四つの獲得は、直立二足歩行、言葉、摂食、基本的信頼感です。誰もが物心つかないうちに獲得するこの四つは、今やかなり意識を持って取り組まなければ十分獲得できないものになっているという危機感を、私自身持っています。歩く、話す、しっかりかんで食べる、人を信頼する、ごく当たり前にも誰もが0歳のときに獲得する大事な課題ですが、今やその課題が、自然ではなく意図を持って大人が丁寧に働き掛けないと十分に獲得されない、厳しい状況になっていると考えられます。

何もない平らな所で転んで、うまく手が出ずに顔を打ったり、歯を傷めてしまったり、あごを打ったりする姿は、何年も前から指摘されながらも、なかなか解決していません。なぜ手が出ないのかを考えると、ハイハイの段階でしっかり自分の腕や手のひらで体重を支える経験を十分にせず、歩行に進んできたかという問題に行き当たります。また、歩く場合でも、しっかりと自分の体重を感じて、大地を感じて、歩行を獲得したのかということが非常に問題になってきます。

歩くことは人間にとって当たり前のことですが、一つ一つ段階を経て、一つ一つ体で実感しながら獲得できてきたかということ、だんだんと怪しくなっています。保育所に来ている子どもたちは、しっかりハイハイをして、しっかりつかまり立ちもして、体の発達の順次性に沿って、歩行に着実に進んでいると思いますが、家庭から来た子どもたちは、ハイハイの期間が短く、できるだけ早く立って歩くことを求められてしまいます。また、そのことがいいことのように思われてしまう傾向があります。

しっかり自分の手のひらなどで体重を支える感覚を持ち、足の裏で自分の体重を支える感覚を持って大きくなっているかどうか。そんな当たり前のことを意識して、保育の中で散歩や園庭、室内の場面でしっかりと歩かせることです。歩く前のハイハイするところから、保育はこれまで以上に取り組んでいかなければならないと思います。

言葉もそうです。自分の思いを自分の言葉で整理して話せるようになるのは、4歳児だといわれています。逆に言えば、4歳児までは思いはたくさんあっても、言葉にならないといわれています。ですから、4歳児ぐらいになると必要なけんかが減り、すぐ手が出るのではなくて、同じけんかでも口げんかになっていたり、相手に少しきつく言い過ぎたりすることはあるにせよ、少しずつ自分の思いを言葉という手段を通して相手に伝えていこうとするようになります。

しかし、ここが非常に難しくなっていて、4歳になっても引っかきやかみつきがあったり、押したりすることがなくなならない場合も出てきているかもしれません。人に自分の思いを伝える、自分の気持ちをコントロールするといった言葉の大切な機能を、乳児のころからもう一度丁寧に育てていく必要性が出てきています。といっても、それは早くから言葉話をさせることではありません。言葉が生まれる前の段階から、伝えたい気持ちをしっかりと持ち、伝わる喜びを感じられる毎日の生活になっているかどうか的大事です。

私は、言葉が育つためには、二つのことが大事だと思っています。一つは豊かな経験です。言い方を変えると、話したいことがある生活になっているかどうかです。「先生、聞いて。こんなこと見つけたよ」「お父さん、お母さん、聞いて。今日こんなこと頑張ったよ」と心が動き、自分から挑戦し、達成した喜びのある生活をしているかどうか、話したいことがある毎日になっているかどうかです。乳児であれば、まとまった形ではないですが、使える短い言葉や単語を駆使しながら、今日あったことを一生懸命伝えたいと思う、話したいことがあるという生活になっているかどうかです。

そして、言葉は話したいことがあるだけでは育っていきません。聞いてくれる人がいないと育っていきません。つまり、もう一つは話したい人がいる生活になっているかどうかです。乳児はまだまとまった言葉は出ないかもしれませんが、楽しいということを共感してくれるような信頼できる保育者がいることで、言葉の前の言葉から子どもたちは豊かになっていくと思います。ですから、言葉ということを0歳のときから今まで以上に意識して、伝えたい思い、伝わった喜び、そのことをもって自分が安心する、気持ちが安定する経験を丁寧に育てていく必要性が出てきていると思います。

その次は食です。私は四つの中で、以前はずっと基本的信頼感や直立二足歩

行、言葉を心配していたのですが、最近の専らの心配は摂食に変わりました。しっかりかんで食べることができない子どもが、大変気になってきたのです。言うまでもありませんが、離乳食とはいろいろな食事を食べられるようになることだけを目指しているわけではありません。ミルクや母乳を吸う行為から、自分の口でかみつぶして飲み込むというふうには、口の使い方が変わるので。だから、いろいろな食材に慣れ、いろいろな食べ物を食べられるようになることはとても大事ですが、そのことと同じくらい大事なものは、まだ歯はありませんが、ミルクや母乳を吸うという口の使い方から、自分の口で柔らかいものをしっかりかみつぶして飲み込めるようにする離乳食だということです。この当たり前の自分でしっかりかみつぶして飲み込むところを、今まではどの子どもも適切な時期に離乳食が始まればできていたのですが、今はできにくくなっています。

今の子どもの中には、前歯だけでかんでいてなかなか飲み込めない子、あるいはゴボウやレンコンなど少し堅めの食材をかむことができずにいつまでも口に残している子、結局はおいしくないし、気持ちが悪いので吐き出してしまったり、飲み込めなかったりする子がいると思います。私たちの口の一番奥には、物をすりつぶす歯が付いています。口の奥を使ってしっかりかみつぶして、飲み込める状態にして飲み込むといった、誰もがしてきた当たり前の方法を、保育園・保育所でしっかりと教えなければできなくなっています。

それは、しっかりかんで飲み込む必要のない柔らかいものを家庭でたくさん食べているからかもしれません。しかし、それを嘆いているだけでは十分ではないので、給食の中でしっかりかむ食材が提供されていることを活用して、かんで飲み込む経験をさせていくことが、もっと意図的に必要になってきていると思います。他県の民間保育園の話ですが、ごく少量のご飯やおかゆなどの食材を口の一番奥に持って行って、「ここをかむのよ」としっかり話して教えながら、どこで、どうかむかを経験させるようにしていると聞きました。

子どもが70～80年の人生を人間らしく生きる上で基礎となる当たり前のことを、今や保育園や保育所の中で一つ一つ意識して、育てていかななくてはなりません。しっかりハイハイすることやしっかりかむことといった人間としての基礎を、ただの声掛けではなくて一緒に取り組みながら獲得させていくことが必要になってきていると感じます。そして、それは一日ぐらい練習してできるも

のではないので、一人ひとりの毎日の生活を大切にしながら、「できたね」「おいしかったね」「たくさんのができたね」と喜びを持って獲得されていくように意識して、子どもたちの生活をつくっていかなければならないと思います。

また、子ども同士の関係の土台として、乳児期における信頼できる大人との関係がとても大事であることは、先生方も日々思いながら取り組んでいらっしゃると思います。やはり信頼できる大人との関係を基盤にしながら、他児に関心を持って、一緒に遊ぶ楽しさを実感することが、0歳児からの生活の中でとても大事だと思います。乳児は最初から関わり合って、声を掛け合って遊ぶことができませんが、大人のゆったりとした働き掛けを受けながら、人と関わるのは気持ちのいいことだ、うれしいことだという心地よさをまずしっかりと感じ、そこから物や人への関心が広がっていくようにしたいと思います。

信頼できる他者がいてくれるからこそ、他児への関心が広がるような生活が大切です。友達と遊ぶといっても4～5歳のように相談し合って遊ぶわけではないので、同じような行動をしながら、他児への関心が少しずつ育っていくような毎日の過ごし方をさせたいと思います。特に0歳児であれば、起きている時間がばらばらだったりします。たとえ短い時間でも、自分が遊んでいて、隣でも誰かが一緒に遊んでいる生活が少しずつ広がっていくことで、他児への関心が少しずつ広がる生活づくりが重要だと思います。

## 2. 乳児期に保障したい生活

### 2-1. わかりやすい生活

人間としての大切な基礎を毎日の保育の中で育てていくときに、乳児期に保障したい生活として、私は一つ目に「わかりやすい生活」ということを挙げています。乳児は「わかりやすい生活」ですが、幼児の場合は「ちょっとだけわかりにくい生活」とも言っています。つまり、少しだけ自分たちで考えてみようということ。全部こうしたらああしてと分かることだけがいいのではなく、どうしたらいいか、みんなで考えたり、工夫したり、少しだけ考えてみる時間をあえて作ることを、幼児では大事にします。

今日は乳児の話なので、子どもたちが自分で分かって、自分からやってみようと思える生活を「わかりやすい生活」と名付けています。「わかりやすい生活」



から、子どもたちの意欲と主体性は生まれてくると考えます。

乳児にとっての「わかりやすい生活」とは、言葉で言い聞かせて「分かったね」という生活ではありません。まずは明日から、乳児の保育室に戻って少し環境を見直していただければと思うのですが、乳児の目線の高さや動線に合わせて、必要なものは目に入り、不必要なものは目に入らない生活になっているかどうかを考えます。そもそも気が散るような環境になっているところで集中させるのは無理ですので、必要なものはしっかり目に入り、不必要なものが目に入らないようにします。つまり、今からしようとする事、今からしてほしいと思うことに気持ちがしっかり向き、同時に気の散りにくい環境がつけられているかどうかを考えます。

乳児の保育室では、どうしても大人は子どもが触ってほしくないものを上へと上げがちです。でも、見えていると、そのことが一層の危険性をもたらすことがあります。台の上って取ろうとしたり、手を伸ばそうとしたりします。見えていると、子どもにとっては興味が出てくるので、必要なものが目に入り、不必要なものが目に入らない環境が必要です。

また、寝ている状態から座ったとき、座った状態から立ち上がったとき、子どもの視線は変わります。動かせる体の範囲も変わるので、子どもたちの周り一体どんなものが目に入るか、目に入らないかを考えていきます。

そして、生活や行為に流れがあるかを考えます。自分で着替えて、自分の着替えたものを自分のかごに入れることは、入れるかごがきちんと分かっていないとできません。脱いだ着替えを持ってうろうろしなければならない生活では、自分でこうしていきたいという気持ちは生まれません。うろうろしているうちに違う興味のあるものが目に入ってしまい、持っていたはずの着替えをぼんと置いて、違うことに行ってしまいます。「ここに着替えが落ちているよ」と言っても、違う方向への興味が強くなってしまっているため耳に入りません。あるいは、手を洗ったときに、拭くタオルがすぐであれば、子どもたちは手を洗って拭くことをきちんと理解できて、スムーズに取り組むことができます。しかし、びしょびしょの手をそのままにしてタオルを探しにいかなければならない生活をしていたら、子どもたちにとって、これをしてからこれをするという見通しは生まれません。

言い聞かせてするのではなく、毎日の繰り返しの中で、先生が一つ一つ声を

掛けなくても、子どもたちが自分で気付いて行動できるような環境や流れをつくることです。そういう意味では、動線の整理も必要かと思います。こちらから行く子とあちらから行く子の動線が衝突する流れになっていると、危険なだけでなく、今から何をするのかという見通しも混在して見えなくなります。生活や行為に流れがあること、それによって次はこうしたらいいという見通しを持てるのが大切だと思います。

クラスの子どもにとって、自分がつくっている環境が見通しの持てる生活になっているか、「わかりやすい生活」になっているかを見極める一つのポイントをお話しします。明日からそういう目で見てもらえればと思います。いつも子どもが同じような場所で、「先生、これでいいの？」という顔をして見上げる場所がないかどうか。そこは結局、子どもが迷うポイントになっているのです。迷うことなく自分が今していることが次につながっていけば、わざわざ大人の顔を見て「これでいいの？」とは言いません。

できたときに「先生、できたよ。偉いでしょ？」と顔を見上げるのと、戸惑って見るのとは違います。「これどうしたらいいの？」といつも同じところで子どもの行動が止まったり、保育者を求めることがあったりすると、保育者は親切で優しいですから、「きちんと次はここに入れるのよ」と声を掛けます。声を掛けることが全部悪いとは言いませんが、声を掛けないと子どもができないということは、その子にとっては分かりやすくなっていないということなのです。大人の声掛けによって気付いてできることがいけないとは言いませんが、子ども自身が自分でこうすると分かって、行動してできたという喜びを持たせるために、保育空間の中で、いつも子どもが先生の顔を見たり、戸惑っていったん動きが止まったり、停滞すると思うポイントがあれば、子どもたちにとってその場所は分かりにくい生活になっているということなので、そのときは、どうか担任間で相談していただいて、少し環境を変えたり、動線を変えたり、見やすい目印を付けるなどして、子どもたちが自分で分かって行動しやすい生活づくりを考えてください。

そうすると、子どもは見通しを持って、自分からしようという気持ちが生まれます。いつまでも目印は要りません。目印は必要なときに使えばいいので、要らなくなったら取ってください。いつまでも目印が大事ではありません。行動するときの手掛かりやきっかけとなるものは、それが必要なときに用意し、

必要がなくなったらなくしていいのです。そうやって環境を子どもに合わせて変えていくわけです。

乳児にとって「わかりやすい生活」とは、自分からしてみようと思える生活づくりをすることです。もちろん0歳児や1歳児にできることは限られています。しかし、できることは確実にあります。大人が「こうしましょうね」とたくさん声を掛けて行う生活ではなく、声を掛けなくても、子ども自身が気付いてできる生活へと、私たちは力点を置いていかなければならないと思います。

その際に大事なのは、乳児の意思を尊重した生活づくりがされているかどうかです。子どもは言語で自分の思いを伝えるまでに時間がかかるので、その意思の存在が分かりにくいですが、子どもを乳児期から意思を持つ主体として尊重し、対応していく必要があると思っています。ただ言葉では言いません。ぐずぐずしたり、反発したり、すねたり、いろいろな表し方をします。でも、その意思を読み取って的確に伝えていくことが、私たち大人の大切な役割だと思っています。

## 2-2. 「その気になれる」環境づくり

乳児の人間らしい基礎をつくる上で、保育の中で大切にしたいことの二つ目は、自分からしようと思えるような「その気になれる」環境づくりです。やってみたいという意欲が湧き、できたという喜びがある生活になっているかどうかです。遊びにおいても同じです。月齢や年齢に合わせて、その子が興味を持ちそうな対象を用意し、それを使って遊んだら楽しいという実感が子どもたちの毎日にきちんと存在しているかどうかです。各年齢にとっての魅力的なものとはどのようなものか、どのようにしたらいいかが分かる生活になっているかどうかを考えます。

面白い遊び、楽しい遊びが大事なのは、5歳まで一緒です。そこで大切なのは、例えば1歳児にとって「面白い」「楽しい」とはどういうものかということ です。楽しくて面白いことはみんな大事だからこそ、0歳にとっての楽しさは直接的な感覚、5歳にとっての楽しさは苦勞して工夫してできたときの達成感など、「面白い」「楽しい」の中にも深まりや高まりがあるのではないかと思います。自分が持っているクラスの子どもたちにとって「面白い」「楽しい」とはどういうことか、どういうものが魅力があるのかと考えて、その用意をしてい

くことが大事ですし、面白くて楽しそうだけれど、どうしたらいいかわからないというのでは子どもは嫌になってしまうので、どのようにすればいいかが見えることも大事だと思います。限られた人数で保育しているのも、どうしても保育しやすい環境になってしまいがちですが、いま一度子どもの目線と動線を考えて、子どもたちにとって分かりやすく、自分で気付いて行動できる保育環境を整えていかなければいけません。

### 2-3. リズムのある規則正しい生活

三つ目は、リズムのある規則正しい生活です。乳児のときには当たり前のことですが、これこそが保育の基盤になります。つまり、乳児は生活のリズムをつくっている真っ最中なので、安定したリズムのある規則正しい生活を送ることがとても大切なことです。睡眠の保障と移行、食事時間と内容、排泄もあります。乳児期は、生活という面では非常に大きな変化のあるときだからこそ、その変化を踏まえながら、リズムがあり、かつ規則正しい生活、毎日安定した繰り返しができちんちん行われているかどうか非常に重要だと考えています。安定した繰り返しがあるからこそ、子どもには見通しと意欲が生まれてくるのです。

リズムのある規則正しい生活とは、一言で言えば簡単ですが、大人同士の協力がないと成立しません。子どもが毎日安定した繰り返しのある生活をしようと思えば、子ども自身の努力ではなく、大人が連携協力し合いながら実現していかなければできません。保育所はローテーションの勤務です。その子どもを朝から帰るまで全部見られるわけではありません。お休みの日もあります。いない時間もたくさんあります。そのなかで、子どもがいる時間にずっといられないのが保育所であると考えたとき、人が代わっても子どもの生活を変えない大人同士の連携が必要です。

それはクラスの担任だけではなく、管理職の先生の力も必要です。保育にはそれぞれ工夫があっても構いませんが、乳児のクラスに関しては、基本的に毎日どういう生活を安定して送っているのかを園全体で理解することが大切です。誰が応援に入ったとしても、毎日の生活が変わることなく、きちんと繰り返しされ、積み上げられていくような園全体の体制も含めて、全ての子どもたちに全ての職員で、リズムのある規則正しい生活を保障していくことが大事です。

もちろん家庭との連携も大事ですが、家庭が協力してくれないからできないのではなく、まずは保育園や保育所での毎日がきちんと安定した繰り返しになるように、人が代わっても生活を変えない連携の仕方がとても大事になると思います。

確かに家庭の中には、お休み後の月曜日、とても疲れて登園・登所してくるお子さんもいるので、生活リズムの乱れがとでもあるかもしれません。もっと協力してほしいと思う家庭がたくさんあるかもしれません。だからこそ逆に、園での生活を軸として24時間をつくるしかないのです。園以外の十数時間を軸として園の生活を考えるのではなく、園にいる8時間や11時間を軸にして、それが変わらないものとして、月曜から金曜まできちんと繰り返されていくことを土台にして、家庭と連携していかなければならないのです。逆に、家庭の生活が多様化し、リズムが乱れがちだからこそ、園に来ているときは毎日同じことがきちんと繰り返されていることが大切だと思います。

この話をすると、保育がとても単調なイメージになってしまうとよく言われるのですが、そうではありません。安定した繰り返しの中で、そのパーツを見ると、きちんと楽しいことがあるかどうかなのです。毎日同じ時間にしっかり同じ場所で食べることを通して、子どもたちのリズムができていきますが、その食べている時間は楽しい時間でなければならぬし、一回一回の食事が楽しみになっていかなければなりません。

#### 2-4. 実感・達成感の大切さ

そういう意味では、「リズムのある規則正しい生活」の中で、実感や達成感がしっかりあることが大事です。これが四つ目に大事なことです。乳児も意思がある存在だと言いましたが、自分でしてみたい気持ちと、できたという喜びが感じられるような、実感・達成感を得られるような生活づくりです。

そのときに私がいつも思うのは、子どもにとって適した時期に、いろいろな対象としっかり出合っていくことが大事だということです。早ければいいわけではありません。適した時期に道具や対象としっかり出合って、自分でどうしたいという気持ち生まれ、できたという喜びが感じられる出会い方を大人は考えていかなければなりません。

でも、適した時期というのは簡単なことではありません。いつが適している

のかを見極めるのは難しいと思います。私は最近、その適した時期を二つの観点からお話するようにしています。一人ひとりにとっての適した時期は、心と体のスタンバイができています。両方が整っているときに、その子の取り組むときではないかと考えて、その二つの観点を最近お話ししています。

心のスタンバイは、その子の心の中に興味や関心、やってみたい気持ちが生まれているかどうかの一つ目の観点です。乳児ですから、「やってみよう」とは言いませんが、どういうときにやってみようという気持ちがあるときなのか、先生方は知っています。先生や友達が使っているスプーンをじっと見ていたり、使えないけれど手を伸ばそうとしたりと、いろいろな行動になって表れます。これがないと、強制することになります。興味や意欲がないのに、させられることになります。

もう一つは、体のスタンバイです。道具操作で言うと、スプーンや箸などの道具を使うことができる手や指になっているかどうか、運動に取り組む体になっているかどうか、体も準備ができています。そうすると、保育士やお母さんから、大体同じ反応が返ってきます。「今までは興味を持ったらさせていたが、体のスタンバイは考えていなかった。では、興味を持って、させないということですか」とよく聞かれます。そのときに私はこんな話をします。

両者のスタンバイがそろったときに本人に適した時期だとしても、二つがそろっていない子もいます。とても興味があるのに、手先に不器用さを持っている子がいます。そういう子に対して、いつまでもスタンバイができるまで待つと言っているわけではありません。他の遊びや活動の中でしっかり手指を動かしながら、興味を持ったスプーンを使うことに向けて、体の方も準備を整えていきます。もし、その子に興味は出てきているけれど、まだスプーンを十分に持てないと思ったら、スプーンをすぐに持たせるのではなく、手や指をしっかりと使って遊ぶことを他の子以上に意識して、一人で遊ぶ時間をそのことにも振り向けていくことを考えます。

逆の子もいます。体のスタンバイは十分できているのに、興味を持たない子ども、やる気がなかなか起らない子どもがいます。そういう子に対しても、ただその気になるのを待ちましようと言っているわけではなく、その気になるように友達がしているのを見せたり、ままごとの中で使ってみたりしながら、

興味を高めていきましょう。両方がそろったとき、子どもにやってみたいという気持ちが生まれ、できたという喜びがあると思います。

特に興味の方が先に来て、体のスタンバイが遅い子どもに早く取り組ませてしまうと、失敗すること、できないこと、注意されることが増えていきます。せっかく今、ご飯を食べることが楽しくなってきた子どもが、「そのスプーンの持ち方違うよ」と毎日言われると、食事が楽しいかどうかを考えてほしいと思います。心と体のスタンバイは、食事の場面なら食事の場面だけで高めていくのではなく、両方が整ったときに道具への良い出会い方をさせたいという視点を持って、私たちが他の部分から働き掛けていくと、子どもたちは実感や達成感を持って、やってみたいという気持ちがかんがう経験を、保育の中で行っていくこととなります。

思ったけれど、かなわなかったことばかりが繰り返されるのではなく、やりたくもないことをさせられるのでもなく、人間ですから当然アンバランスはありますから、心のスタンバイと体のスタンバイを見ることで、どちらをもう少し励まし高めることが、その子が意欲を持って達成することにつながるのかを考えます。子ども一人ひとりに、心のスタンバイと体のスタンバイの視点を持って見ていくと、より意識的に取り組んでいけると思います。待ちの姿勢ではなく、そういう二つの視点を持って、この子のどこをもう少し豊かにしていくことが必要か、両方のスタンバイをつくるのが大事だと思います。

## 2-5. 安心できる他者の見守りの中で

最後に、安心できる他者が常に自分を見守っているという実感を、保育の中で子どもたちが感じるのが大事です。3歳以降、友達関係が豊かに育っていくためにも、その前段階の乳児のときに、保育者との関係の中で、誰かといると楽しい、誰かといると安心するという基本的な実感を持たせることは大事なことです。人といると怖かったり、自分のやりたいことができなったりするマイナスの感覚ではなく、誰かといると楽しい、先生と遊ぶと楽しい、先生がいてくれると寂しくないというプラスの感情がとても大事だと思っています。乳児期が、これからの長い人生を人間らしく生きていくための重要な基礎の時期だからこそ、安心できる他者の見守りの中で子どもたちが毎日過ごせることが大事です。

0歳児でも、先生は私だけのものではないと分かっています。子どもにとって家庭にいる父母は自分だけを見てくれる大人ですが、保育者はそうではないことを分かっています。みんなの先生だということは、子ども心に分かっています。しかし、みんなの先生がきちんと自分のことも見てくれていると感じられるかどうか大きいわけです。みんなの先生が、きちんと自分のことを見てくれていて、気に掛けてくれていて、SOSを発信したときにきちんと来てくれることで、子どもたちは信頼感を持つわけです。

その大人への信頼が、周囲の関心や他児への関心につながっていきます。だからこそ、保育園や保育所に来ているとき、お父さん、お母さんはいませんが、先生といると安心して挑戦できたり、苦手なものを頑張れたり、好きなことを思い切りできたりします。常に大好きな先生の存在とまなざしを感じることができる過ごし方が重要だと思います。

### 3. 大人と向かい合って、共感しながら遊ぶ

乳児のときの遊びは、幼児のように形のあるはっきりとした遊びではありません。子ども同士の関係が豊かになるためにはまず、大好きな先生と一緒にいるとうれしい、安心できるという根本的な信頼が大事だということと重なるのですが、子ども同士の楽しい遊びを豊かに発展していくためには、乳児のときに大人との関係の中での遊びの楽しさを、きちんと経験していることが大事です。大人と向かい合って、大人と共感しながら遊ぶことが乳児にとってとても大切です。

だからこそ、発達に合った魅力的な対象が要ります。あおむけで寝ているときには、あおむけで関心の持てる遊びが要ります。あおむけで寝ていると、上方にしか子どもたちの視野はありません。でも、手が動かせるので、つり下げているものを触って音を出すなどしていると思います。各発達に合わせた時期に魅力的な対象が子どもたちの周りにあり、それをしたときに「いい音がしたね」「柔らかいね」「転がったね」など、すぐ近くで自分の感じたことを共感してくれる大人がいて、そんな人と一緒に遊ぶことが、乳児の遊びにおいてはとても大切です。生活と同じですが、やってみたいという気持ちを大切にしながら、それを少しずつ経験につなげていくのが乳児期です。

私は、乳児期は偶然がとても大事だと思っています。最初から粘土や砂で作



りたいものを考えて作れるような年頃でもありませんが、たまたまできた丸い形のものをお団子に見立てたり、それをたまたま隣にいた子に「はい、どうぞ」と言って渡したりします。最初からその子が大好きで渡してあげようと思っていたわけではありませんが、先生がたまたま「Aちゃんにも渡してあげたら」と言うと、「はい、どうぞ」と言って渡します。意図を持って、選択してその遊びやその対象を選んだわけでもなく、たまたまできた形やたまたま隣にいただけの友達かもしれませんが、その偶然が遊びのきっかけや、人との関わりのきっかけになっていくと思います。

子どもがすごいと思うのは、その楽しさを一度知ると、次は偶然ではなくなることです。粘土や砂をぐしゃぐしゃしているうちに、たまたま丸いものができて、「お団子みたいね」と先生に共感してもらえた子どもは、次もまた団子を作ろうと思って、今度は意図を持った活動になります。たまたま隣にいた子に「はい、どうぞ」と渡して楽しかったら、またその子に持って行ってあげたいと、今度は意思のある行為になります。ですから、ずっと偶然でいいと言っているのではなくて、きっかけは偶然であっても、そのことが楽しかったら、子どもにとってはまたしてみたいことになったり、また関わってみたい友達になったりして、「〇〇ちゃんに貸してあげたい」と思うきっかけになるのです。

幼児であれば、私は逆のことを言います。どうしたいかを子ども同士で考えて作るような、頭の中で一回遊ぶことを大事にしますが、乳児期はその前に、偶然であっても楽しかった、〇〇ちゃんと一緒に遊ぶのは面白かったということが、「またしたい」とつながり、誘い合って遊ぶことにつながっていきます。その最初の偶然のところも大切にしながら、遊びが広がったり、関わりが広がったりするきっかけを私たち大人が見逃さないことが大事です。たまたま隣にいた子に対して生まれた行為が、この子にとって遊びの楽しさや友達と関わる楽しさのきっかけになると思うのです。

ですから、それを見逃さないことです。他児との共感や共有も幼児のようにはいかないので、一緒に何かをした経験が大事なのです。これは特別なことではありません。一緒に散歩に行ったとき、急にカラスが飛び立ってみんなでびっくりした経験だったり、読んでもらった絵本で一緒にドキドキしたり、怒ったり、泣いたり、共に何かをする経験が大事です。乳児のとき、子ども同士をつないでくれる感情の共有が大事です。まずは大人と向かい合ってしっかり一

緒に遊び、子どもが何を感じているかに共感を寄せながら、こんなことが楽しいのだな、こんなことをしたいと思っているのだなということを見つげながら、子どもと一緒に遊ぶのは楽しいという経験をしっかりとすることが大事だと思います。

保育士は6年間の長い保育に責任を持つ仕事ですが、私は乳児の保育者と幼児の保育者には違う専門性があると最近思っています。乳児の保育者に求められる専門性の一つは、乳児はまだまだ言葉が豊かではないので、言葉にならない思いをどれだけ気付いたり、感じたりできるかだと思います。表情だったり、普段との違いだったり、すねたり怒ったりかみついたり、いろいろな形で発信するその子の思いのありかを、言葉だけに頼らず探していくことです。言葉にならない思いに気づき、発見する力が必要であり、保育士はこの力が抜群に高いと思っています。

「この子はこんなことがしたいのだろうな」「これが好きなのだろうな」と気付く力はものすごく高いので、次の専門性としては、気付いたことを言葉にして子どもに返す力が要ると思っています。まだ言葉を十分に操作できる年齢ではないので、自分が分かって終わりではなくて、言葉にはなっていないけれどもこんな思いがあるということに気づき、共感する力は、素晴らしい専門性だと思いますが、もう一つ大事なものは、その気づきを言葉にして子どもに返すことです。

子どもは大人から言葉を返してもらって、言葉が豊かになって、自分の感情に名前が付いてきます。転んで痛かったとき、先生方は「痛かったね」と声を掛けると思います。これは単なる慰めではありません。その感情をきちんと誰かに受け取ってもらって、「洗って薬を付ければ大丈夫だよ」と言って処置してもらうことで、子どもはこの痛かった状態が得体の知れない怖いものではなく、大丈夫だと安心できるのです。言葉にして返すことで、子どもたちは気持ちに名前が付いたり、状態に名前が付いたりして、分かって安心するのです。べらべらたくさん話すことではありません。その子の言葉の代わりに、自分がしっかり言葉に思いを乗せて、言葉にして返していくことです。その力が乳児期の保育者にとって大事な専門性だと思います。

幼児期は少し違います。幼児期は言葉でいろいろ言ってくるので、言ったことを否定せずにしっかり受け止める力が要ります。言葉にならない言葉を読

み取ったり、見つけていったりするのではなく、まずは子どもたちが間違っていたり、自分勝手だったり、つたなかったり、実現不可能な考えだったりしても、いったんは否定せずにしっかり聞く力が要ると思います。

そして、しっかり聞いて、「好きなようにやっごらん」ではありません。幼児期の保育者は、そこから一緒に考えていく力が要ると思います。「これ、できないから駄目」と判断するのではなく、最初の判断は子どもがするのです。「これ無理そうだな」「こうしないと無理かな」「こうやったらできそうかな」と、子どもたちが実際にできそうなもの、達成可能なものへともっと考えを深めていくために、一緒に参加しながら考える存在が、幼児の担任には求められていると思います。このように、6年間かけて発達していくのに合わせて、保育者に求められる専門性は変わってくると思います。

乳児の保育者は、言葉にならない言葉をしっかり行動や様子の中から発見する力と、その発見したことを言葉にして子どもたちにしっかり返していく力が必要です。子どもは言葉では言いませんが、しっかり聞いています。寂しい状態でも、先生が近くで「大丈夫だよ。先生と一緒にするからね」と言ってくれて安心している状態を子どもたちが知ることによって信頼感が生まれ、自分の気持ちが豊かに育っていきます。つまり、大人がしっかり向かい合って遊ぶことや、しっかり子どもと信頼関係をつくるのが、乳児期には非常に重要なのです。

### Ⅲ 自我を豊かに育てる

#### 1. 「自我が育つ」とは

もう一つ乳児期に大事なものは、1～2歳児期の大きな課題である、一人ひとりの自我を豊かに育てることです。「いや」「自分で」という言葉が出れば、自我が育っているかという問い掛けだと思ってください。「いや」「自分で」という言葉が出るのはとても大事なことだと思いますが、ただ「いやいや」と言っているのは、自我ができてきているわけではありません。大事なものは、「いや」という言葉の向こう側に何があるかです。乳児ですから、自覚できているわけではありません。でも、大人は子どもが発する「いや」の向こう側に何が育っているかを見て、それを育てていかなければなりません。つまり、何がどのように嫌なのかが大事だと思うのです。自我の育ちをきちんと自分の意思の発揮や自己主張につなげていくために、ただのわがままではなく、「いや」という

言葉の向こう側に、何がどのように嫌なのかを見つけていく必要があります。

靴を履くのが嫌なのではなくて、勝手に履かされたのが嫌なのであれば、その「いや」は自分で履きたいという意味です。自分は左から履きたかったのに、右から履かされたから「いや」なのは、全く根拠も何もあります。たまたまその日の気分がそうだっただけです。ですから、この子はわがままを言っているかどうかではなくて、「いや」の中に自分の意思として何を持ち始めているのかに気付くことが大事です。

ですから、自我を豊かに育てるのは、わがままを聞くことではありません。どうしたいという思いがどのように生まれてきているのかに気付くことです。「いや」という言葉の向こう側に、どんな思いが生まれているのかが大事です。乳児期の子どもたちには、自分なりのこうしたいという思いや、自分のことは自分でしたいという思いは生まれてきています。自分がこう思っているのに勝手にされるのは嫌という意味は芽生えてきています。ただ、それを伝える方法はまだまだ未熟です。

言葉の発達は、4歳児が非常に大きなターニングポイントです。4歳児になると、少しずつ自分の思いを自分の言葉で整理して言えるようになります。2～3歳でも、非常によくしゃべるので言いたいことを言っているように聞こえますが、言いたいことの何分の一しか言えていないと思っておく必要があります。4歳になって、いろいろなことが整理して言えるようになると、何が嫌だったか、どうしたかったかが説明できます。ただの嫌ではなくて、自分の思いを少し整理して言えるようになります。それまでは、思いは持ちつつも、それを表す手段がまだまだ未熟なのです。

思いと言葉は、一緒に育っていきません。人間の発達にはいろいろ順次性があります。体でも最初に育つのは神経で、骨格や筋肉は遅れて発達します。最初に育つのは頭で、だんだん下へと発達します。発達にもいろいろ順番があって、アンバランスがあります。思いと言葉もアンバランスの代表です。思いがぐんと先に育ちますが、言葉は文化ですから時間がかかります。思いが出た後、言葉が後で追いついていきます。

だから、先に、ほんと出る思いが、どうしても先行してしまいます。言葉がまだ付いていけていません。だからこそ、「いや」「自分で」としか言えていないけれど、その言葉は何がどのように嫌なのか、何をどうしたいと願っている

表れなのか、言葉にならない言葉を、普段との変化などから発見していく目を私たちが持つのです。方法が未熟だと、言葉以外の方法で意思を伝えるしかないわけで、そのために乳児保育をしていて最も気を遣う、かみつつきや引っかきが出てくるわけです。

4歳になっても、引っかきやかみつつきがなかなか直らないのはとても切ない話です。先ほど、自分の思いを言葉で話せるようになるのが4歳だと言いましたが、4歳になっても引っかきやかみつつきが抜けない子は、自分の思いを自分の言葉で伝えられなかったり、認識が少しゆっくりで、相手に正論を言われてしまうと、整理して返すことができななかったり、分かることができなかったりするのです。分からなかったら自分が持っている最大の武器を使うしかないで、かんだり引っかいたりしてしまいます。

1歳同士がかみつきのとは話が違います。3歳以降、他児への認識がぐっと高まり、言葉で伝えようとする姿がたくさん出てくる中で、認識がゆっくりだったり、言葉がなかなか追いついていかない子どもたちに、どうしてもそういう状況があるのです。4歳は正義感も強いし、いろいろ守ろうとするので、「駄目じゃない」と正論を言われると、返す言葉が持てない子どもは、言葉ではないことで返してしまいます。ですから、思いは生まれているのに言葉が追いついていない状態で、足りないところを補うのが大人の大事な役割です。この子にはこんな思いが生まれているという理解と、それを伝える手段が未熟だという間のアンバランスを、私たちがより良く補っていくことが求められるわけです。

自我が芽生え、自分なりにこうしてみたいという気持ちが生まれることの背景に、一つ大切なことがあります。私はこれを「つもり」と呼んでいます。やってみたいという思いや、できたという実感を支えているものに、1歳児の「つもり」があります。幼稚園の先生も、保育園や保育所の先生も、見立て・つもり遊びの「つもり」をよくご存じだと思います。猫になったつもり、お母さんになったつもり、店員さんになったつもりで、何かになりきって遊ぶときによく使います。私がお話したい「つもり」は、何かになることではなくて、自分なりにこうしようという思いが生まれることだと思ってください。

先ほど、右から靴を履くのは嫌で、左から履きたかった子の話をしましたが、これは、この子の中に左から履こうという「つもり」が生まれたということ

す。どちらがいい悪いではなくて、今まで大人がしてくれることを受け身で受け入れていた乳児の中に、理由はともかく、今日は左から履こうという「つもり」が生まれたということです。しかも、この自我が芽生える1～2歳の「つもり」は、今と直結する一つ先のことにつながっているのが素晴らしいところです。一つ先のことを期待しながら目の前のことを頑張るということです。

先生方は毎日、「手を洗って給食を食べようね」と言いますね。「はい、手を洗いましょう」「はい、給食を食べましょう」と言う人は誰もいません。「手を洗って給食を食べようね」「お靴を履いてお外に出ようね」「お帽子をかぶって公園に行こうね」と、多分当たり前のように言っていると思います。これが子どもたちの「つもり」と見通しを与えているのです。つまり、当たり前には手を洗うことです。しかし、それは子どもたちに、その先に楽しい給食が待っていて、給食のことを楽しみにしながら手を洗うという一連のことを提示しているのです。

「お靴を履いてどろんこ遊びをしようね」という声掛けは、子どもたちの中に「どろんこ遊びが楽しみ」という期待感をしっかり持たせつつ、今は頑張って靴を履く気持ちを生み出しています。子どもの中には、靴を履いて外に出るという「つもり」が生まれます。「靴を履きましょう」「はい、次は遊びましょう」ではなくて、靴を履いて外に出るという「つもり」が生まれてくるのです。だから、一刻も早く外へ出たいだろうと思って大人が靴を履かせてあげると、ぼんぼんと靴を放り投げるわけです。「つもり」が崩されてしまうからです。その子の中には、外に行くことのみが「つもり」で生まれているのではなく、靴を履いて外に行くという、短いスパンであっても一連の「つもり」が生まれているから、「つもり」が大人の善意によってシャットアウトされてしまったことになるのです。だから、せっかく履いた靴をぼんと放り投げたり、「もう行かない」と言ったりするのです。

保育者は「〇〇ちゃん、お外好きでしょう」と、その先の期待感で何とか気持ちを立て直そうとしますが、その前のところが邪魔されたことが嫌だったので、いくら「お外へ行って、どろんこ楽しいよ」と一方だけ高めようとしても駄目なわけです。その子の中で「つもり」が生まれたことを、大人が善意で遮断してしまったことが嫌だったわけです。だったら、もう一度、「ではお靴、

自分で履いて出ようか」というところに戻るべきです。「お靴を履いてお外に出ようね」と言ったのに急いで履かせてしまったことがその子にとって嫌だったわけだから、靴を履いて外に出るという「つもり」にかなう関わり方を、もう一度する必要があります。

これは、「つもり」が生まれている今とその先で、乳児にも一つ先のことを期待しながら今を頑張れる力があるということです。5歳児のように、1か月先の運動会に向けてみんなで頑張ることは、乳児にはできません。でも、1歳のときに、手を洗っておやつを食べる、帽子をかぶって外に出る、大好きなバッグを持って大好きな公園に行く、一つ先の見通しを期待しながら頑張る生活をしっかりしていくことが、運動会をどんなふう頑張ろうか、発表会に向けてみんなでどう練習をしようかと、少し遠い先のことを見ながら今を考えていく力につながるのです。

自我が豊かに育つには、その子なりに生まれ始めた言語には出てこない「つもり」を、大人が理解することが必要です。私たちは「こうしたかったのだな」とはよく言うのですが、「こうして、こうしたかったのだな」の前の部分がないがしろにされていないでしょうか。おやつさえ食べられれば、どんな状態で食べてもよかったわけではありません。座りたかった席に座れなかったと言ってぐずる子がいます。大人から見ると、おやつを食べられればどの席も一緒だと思いますが、一緒ではないのです。

私は、この子がAちゃんの隣に座っておやつを食べようという「つもり」になっていたのに、中断されたのが嫌だったから、他の子を移動させてまでそこに座らせなければならぬと言っているわけではありません。この子にはこういう「つもり」があったから、こういうぐずり方になっているのだということに気付き、その場所が空いていなかったら、次の「つもり」をつくってあげなければいけないと言っているのです。「こことここが空いているけど、どっちに座って食べるかな」と話をしながら、この子が座っておやつを食べる新たな「つもり」をつくるようにします。「つもり」がかなわなかったとき、「どの席でも一緒でしょう」ではなくて、次の「つもり」をきちんとつくれるように、「ここが空いていないのだったら、ここに座っておやつを食べたいな」と思えるように、自分で思ったことをかなえていくことを、私たちは援助しなければなりません。2～3歳までは、やりたくてもできないことがたくさんあり

ます。たくさんどころかほとんどです。ですから、乳児のときは、やり方をしっかり教えたり、必要な手助けをしたりしながらやってみたくいことがかなうようにすると、またやってみたくなるのです。

最初に、幼児には「ちょっとだけわかりにくい生活」をあえてつくると言いました。どうすればいいのかグループで相談してみる機会も幼児の育ちとしては大事ですが、よくよく考えると、幼児になってどうしたらいいかと考えることができるのは、できた経験があつての話です。経験もないところから、どうしたらいいかと時間をかけて相談すれば、できるようになっていくわけではありません。ですから、3歳までは引き出しの中を埋めていく時期だと思っています。こういうふうにはやったらこんなことができたという経験を引き出しの中にたくさんためて、一つずつ増やしていく時期だと思えます。

ですから、3歳までは少し具体的なアドバイスをしませんが、指示はしません。ここは難しいのですが、子どもが困って「先生、どうしたらいい？」と聞いてきたときに、「こうしなさい」と言うのではなく、「こんな方法やあんな方法もあるけれど、どれかやってみる？」と方法をきちんと伝えて本人が選択できるようにして、少し具体的なアドバイスをしながら経験を積み重ね、引き出しにためさせるのです。「どろんこ遊びをしたら楽しかった」「みんなで散歩に行ったら楽しかった」という楽しかった経験をためている時期が乳児期なのです。

そして4歳児になったら、幼稚園の4～5歳児なら4歳後半かもしれませんが、今度はためてきたたくさんの経験の中から、困ったこと、どうしたらいいかわからないことがあったときに、何か使えそうなものがないかと引き出しから探してくるようさせる。4～5歳になったら、具体的なアドバイスをするのではなく、子どもたちが考えることができる促しが大事になってくると思えます。ただ、「もう4歳だから自分で考えなさい」と言うだけでは駄目です。例えば「何か前に似たようなことをやったことなかったかな」「他のグループはどういうふうにはやっていたか、聞いてみる？」「年長さんに教えてもらいに行こうか」など、子どもたちに考えるきっかけを気付かせるような声掛けの仕方によって変わっていきます。直接的に方法を教えるのではなく、方法を探す手助けをするような声掛けによって変わってくると思えます。今までしてきたことの中で何か使えるものはないか、以前はこんなふうには解決したから、こんなふうには相談



してみたらいいのではないか。よそから知恵を借りてくるだけではなく、自分のストックの中からも探していく。それでも分からなかったら、先生に聞いたり、年長さんに聞いたりもする。自分の経験したことから、こうやってみたらどうかということを考えるような経験も大切にしていけたらいいと思います。

少し具体的なアドバイスをしながら、こんなふうにできたという成功経験や肯定経験を積み重ねていく0～3歳の時期に対し、4～5歳になったら、困ったときにすぐ教えてもらうのではなくて、自分たちで考えることへと少し保育の力点を変えていく。そうすることで、やってみたいと思ったことができたり、つながるような、教育や保育が大事だと思います。

## 2. 他者との関わりの中で自我が育つ

自我は一人では豊かに育たないので、他者との関わりの中で育つことが大事です。ですから、家庭で、大人と1対1の関係で子どもの自我を育てるのは、とても大変だと思います。昔であれば、地域にたくさん子どもがいて、公園に一步出れば、たくさんのおつきあひもあったと思いますし、きょうだいがいたり、親戚がいたりして、他児と関わるのが自然にたくさんあったかと思っています。しかし、現代のような少子化の中で、大人と1対1の関係の中で日中を過ごしている子どもの自我の育ちは、とても難しくなっています。ですから、保育園や保育所に来て、集団的な保育を受けている方が、子どもたちの自我の育ちにとっては良い状況だと思っています。それは、自我は他者との関わりの中で育っていくもので、一人で作れるものではないからです。自我が芽生えて育つ環境は、先ほどの「いや」という言葉の裏側に何かがあるのかをきちんと聞いてくれて、思いを大切にしてくれる人がいないとできません。一人で子育てをしている保護者は、赤ちゃんのときはあんなにニコニコして大人の言うことを全部受け入れていたのに、急に反抗的になってとても戸惑うので、元に戻そうと思って「そんなわがママを言っては駄目。いやじゃないでしょ」となりがちですが、「いや」というのは、こうしたいという表れなのです。

そして、他児との間で自我が育つと言いましたが、1歳でいろいろな衝突が起り、引っかきやかみつきが増えるのは、AちゃんとBちゃん双方に「つもり」が生まれてきたことの表れです。両方に「つもり」がなければ多分大丈夫

ですし、両方が「つもり」を表す言葉を持っていれば衝突することはありません。乳児期は思いが先行し、言葉がゆっくり育っていく途中だからこそ、それぞれに「つもり」は生まれているのに、「つもり」を伝え合う手段がまだ十分ではないために、衝突を引き起こしやすくしているのです。

大人でも感情の行き違いはあります。でも、すぐに衝突しないのは、「私はこう思うよ。その意見も確かにそうだと思うけれど、私はこっちが要ると思う」と相手のことを尊重して受け入れながら、自分の思いを伝える言葉を持っているからです。でも、乳児にはまだそれがありません。1歳児の衝突は、言葉というクッションがない中で、それぞれに生まれた「つもり」が生の状態ダイレクトにぶつかり合うものだと思います。言葉が思いよりもゆっくり育つため、思いがダイレクトにぶつかり合う、言葉以外の表現方法を使うしかないので、かみついたり引っかいたりするのです。だからこそ、そのぶつかり合いが、子どもたちが人と関わりながら、衝突しながら自我も太らせていき、相手を尊重すること、相手を大切にすることも学んでいくスタートになるのです。

ですので、私はよく、1歳児の自我が芽生えるとき、それぞれに思いが生まれるときに相手の思いを知るスタートの時期だと言っています。1歳で相手の気持ちが分かるとは思っていません。もっと時間がかかります。でも、自我が芽生える1歳児のときに、自分に思いがあるのと同じように、相手にも思いがあることを知ることが大切だと思っています。4～5歳になって、急に思いやりが育つわけではありません。1歳のときに自分に思いが生まれて、先生がきちんと「あなたはこうしかったのね」と言葉にならないものをくみ取ってくれて、自分の思いが大切にされたことを知ります。そして、「Bちゃん、こうしかったんだって」「Bちゃんもおもちゃ欲しかったんだって」と先生方は声掛けしますが、あれは単なる慰めではありません。「Aちゃんがこのおもちゃを好きなと同じように、Bちゃんも好きなんだ」「Aちゃんに思いがあるのと同じように、Bちゃんにも思いがあるんだ」ということを子どもたちが学ぶ大事な一歩を、一人ひとりに「思い」や「つもり」が生まれるこの大事な時期に踏み出すのだと思います。ですから、このときに相手の気持ちを分かりきる必要はありません。一緒に、丁寧に、大事なスタートを切っていくことだと思っています。

4月生まれと3月生まれの子を想像すると一番分かりやすいですが、月齢差

があると、このような形の衝突が生まれます。4月生まれのAちゃんは自分で靴を履くこともでき、友達が靴を履けずに困っているのを見たら、手伝ってあげたいという気持ちが出てきます。低月齢の3月生まれのBちゃんは靴をうまく履けませんが、自分で履きたい気持ちが生まれてきています。その状況で、AちゃんはBちゃんがうまく履けずにいるのを見て、手伝ってあげようとしています。すると、Bちゃんから拒否されて、「いや」と言われます。この状況がAちゃんとBちゃんの「つもり」の衝突場面です。Aちゃんは決してBちゃんの邪魔をしようとしたわけではなく、BちゃんはAちゃんの親切を無にしたわけでもありません。Aちゃんには、Bちゃんが困っているからお手伝いしてあげたいという「つもり」が生まれ、Bちゃんには自分で履きたいという「つもり」が生まれています。そのときにAちゃんが「手伝おうか」、Bちゃんが「大丈夫。自分です」と言っていたら、衝突になっていません。これが、思いは先に行くけれども、言葉が追い付いていない乳児の姿です。

大事なものは、衝突しているように見えるけれども、それぞれの中に違った思いが出てきていて、それを伝え合う手段がまだ十分持っていないからこそ起こるダイレクトな衝突だということを理解することです。そうすると、私たちの大事な役割が見えてきます。両方がどんな思いを持ったのかを見つけていくのも大人の大事な仕事なら、言葉にして返すのも大人の大事な仕事です。先生たちは、「仲立ち」「仲介」という言葉を日々使っていると思います。まさにそれです。その子の気持ちをきちんと受け止めながら、他の子には別の気持ちがあることを知らせます。言葉にならないものを見つけながら、言葉にして返していきます。仲立ちという行為が、自分の思いを誰かが受け止めてくれたことのうれしさと、人には人の思いがあるということを知り始める大事な一歩を、子どもたちに提供してくれるのです。相手の立場に立って考え、思いやりを持つことの根本は、人には人の思いがあることを知ることです。子どもはそうでなくても自分の思いが中心ですので、私はこうしたかっただと同じように、Bちゃんにはこういう思いがあったということ、乳児のときから知ることが大切だと思います。

### 3. 自我が豊かに育つ保育に向けて

自我が豊かに育つ保育に向けて大事なものは、子ども自身が見通しを持って興

味ある対象にずっと挑戦できることと、パーソナルスペースの確保です。「つもり」のぶつかり合いは自我を豊かに太らせていく上で欠かせないことだと思うので、私は衝突がない生活がいいと言っているわけではありませんが、子どもたちが自分でしてみたいと思うことをいつも邪魔されるだけでは、思いがかなっていき実感がありません。必要な衝突はあると思いますが、不必要な衝突が起こらない、間（ま）の確保も必要です。

ここでなら他の子に邪魔されることなくできるような、やりたいことがかなうような間を、きちんと一人ひとりにつくることです。どうしても興味があって、結果として友達の邪魔をしてしまったとき、もちろん仲立ちしながら「こういう気持ちだったんだよ」と言うことは大事ですが、いつもやりかけて邪魔されるだけでは、願いがかなった、思いがかなったことになっていきません。柵で区切るわけではありませんが、そういう遊びをしているときは、他の子に邪魔されることなく十分に遊べる場をつくることです。数がたくさんあればいいとは思いませんが、3歳までは貸し借りがまだできないので、自分がこれを使いたいと思ったら、十分に楽しめるだけの一定量の確保もしながら、自分のやってみたいがかなう生活を大事にしていきます。

もう一つ大事にしなければいけないのは、思いを出せて、自分が共感される生活です。他者を感じられる生活、安心できる他者がいる生活が大事だと言いましたが、0～2歳の時期は、特定の他者、大人との心地よい関係を土台にしなが、人を信頼する、誰かといると楽しいと思うことを知っていくとても大切な時期です。そして、3歳児以降、特に3歳児の最初は、一緒にいたら楽しいということ子ども同士が関わりながら経験し、本格的な子ども同士の関係と大人との関係をしっかりつないでいく大事な時期です。

だからこそ、大人としっかり楽しんで遊んだり、子どもの楽しい思いに大人がしっかり共感することで、「これが楽しいんだな」と理解します。子どもは同じ本を何度も「読んで」と言ったり、同じことを「もう一回しよう」と言ったりします。大人にすれば、ついつい違うこともさせてみたいと思うのですが、そんなときは、その子の楽しいに共感する立場でもう一度考えてもらうと、「この子は、予想してその通りになることが楽しいんだな」ということが分かります。絵本などもそうです。繰り返して読むと、ここで何が登場するか知っているのに、「やっぱり出てきた。ああ、よかった」と分かって「楽しい」という

こともあると思います。この時期は、何度も同じことをしようと言う子どもたちの思いに共感しながら、0歳のときに生まれる大人との信頼関係を、その先の3歳児以降の子ども同士の関係につないでいく大事な時期なのです。

子どもたちが褒められるとうれしいのは、認められるからという理由もあると思いますが、褒められるとそれでいいという確信を持てるからだ、私は思います。子どもたちはお手伝いをして先生に褒められると、大好きな先生から認めてもらえてうれしいのですが、それだけではないのです。私がした行為はこれでよかったのだ、私のやり方はこれで正しかったのだと、誰かに照らして確認するのだと思うのです。

私がそう思い始めたのは、人間が言葉を獲得するときと同様だからです。子どもが不明瞭な発語で例えば「ママ」と言ったとき、「そうね、ママね」と大人が言います。それを聞いて、自分の言ったことはこれでよかったのだと確認して、子どもは発語できるようになっていくそうです。ですから、両親が聴覚に障がいを持っていたりすると、それが難しかったりします。子どもが一生懸命「ママ、ママ」と言っているのに対して、聞こえていないことだけでなく、返しがいないことが子どもの言葉の育ちにとっても厳しいのだそうです。

手伝いや友達への協力など、子どもが発した言葉や行動は、自分では良かれと思ってすることです。それを、大好きな人が「それでいいんだよ」「あなたのしたことはいいことなんだよ」と評価することは価値を付けることになります。ただおだてるのではなく、あなたのしたことは素晴らしいこと、価値があること、いいことであると伝えているのです。なので、子どもたちは「頑張ったね」「こんなことしてくれてありがとう」という言葉を聞くと、先生から褒められてただうれしいのではなく、私のしたことはこれでよかったと確認しているのだと思います。

そして、「そうではなくてこうしてあげようね」と修正されていく中で、そうではない行動を獲得していくのだと思います。ですから、私たちの仕事は、子どもたちの思いをしっかり受容し共感しながら、何が大切で、何が素晴らしいことなのかを教えていく仕事だと思います。子どもたちに、これから生きていく上での価値基準、規範意識にもなるかもしれませんが、何が素晴らしいことを教えている大事な仕事でもあります。道徳のように教科書で教えるのではなく、日々の生活の中で、子どもの素晴らしい行動や頑張ったことを見つけ

て、受け止めて、認めて、褒めながら、あなたのしたことは価値がある、あなたが努力したことは素晴らしいことだと評価しながら、子どもたちが確信を持つことができるように働き掛けていくのが大切です。それは5歳になって始まるのではなく、乳児のときから一つ一つの行動が大人によって認められることで、子どもはこれでいいのだと安心します。受容され、確信を持つ側面が大事ではないかと思います。

そして、他児に関心を持つけれども、うまく関われないのが乳児期です。それぞれに思いと思いが出てくるからこそ、衝突が出てくるのも乳児期です。だからこそ、「けんかするから離れておきなさい」ではなくて、関心が生まれたことを大切にしながらも、言葉を添え、時には代弁しながら伝え合うことを知らせ、「Aちゃんの気持ちはこうだね」「Bちゃんはこんなことしたかったんだね」と、それぞれの思いを大事に受け止められ、他児にも思いがあることを知る機会にしながら、子どもたちは育っていきます。人と切り離されて自分らしい人間になるのではなく、人と関わりながら、衝突もしながら、仲立ちもされて、仲直りもしながら、自我が豊かに育っていくことを乳児期は大切にすべきだと思います。

#### IV 保護者との共有

乳児の保育には、保護者との共有、共感、連携が欠かせません。初めてのお子さん、初めての保育園や保育所であっても、そうでなくても、保護者にとっては不安な要素がたくさんあるのが乳児期です。そういう私も、0歳から子どもを保育所に通わせて、たくさん不安はありました。きちんと昼寝ができるのか、きちんとご飯が食べられるのかから始まって、いろいろな不安がありました。どの保護者も不安を持ちながらの保育園・保育所生活だと思います。そこで、こんなことを共有できれば安心ではないかということをつ三つ挙げました。

まず、乳児期が人間としての基礎であり、それがとても大切であるということです。保護者としっかり育てていくことが必要です。しかも、基礎はすぐに結果が出ないことも一緒に共有していきましょう。大切にしていることの結果が出るのは数年後、数十年後かもしれないけれど、人間らしくしっかり自分の足で歩き、自分の言葉で話し、しっかり食べて、人と関わりながら育っていくことです。

これから70～80年、人間らしく生きていくための基礎は、この乳児期にあることを保護者とも話したり、また特に引っかきやかみつき、いやいやが出たりする時期なので、自我が育つとはどういうことなのかも丁寧に話していく必要があります。

「いや」という言葉の裏側には、こうしたいという気持ちが生まれていることも含め、自我が育つとはどういうことかを大切にしていかななくてはならないし、0歳児はもちろんのこと、1～2歳児が人間らしい基礎の上に、その子らしさが育っていく大切な時期であるということもきちんと一緒に話をしていかなければならないと思っています。

そして、今大切なのは、こちらからできる支援ではなくて、保護者の状況に合わせた支援だと思います。私たちの側は、こんなことだったらできるのではないかと、こちら側が考えることをいろいろしてきたと思いますが、あらためて、保護者の状況に合わせた支援が必要になってきていると思います。

もう一つ、私が保護者との関係でよく話をするのは、こちらから与えるのではなく、保護者自身の決断や選択を大事にすることです。子どもたち一人ひとりを意思のある存在として大事にするのと同じように、保護者との協力関係、信頼関係をつくるときも、こちらから与えるのではなく、保護者自身が判断できたり、選択できたり、決定できたりすることを大事にできればと最近思っています。

例えば、いろいろなことができていない保護者の方がいるとします。生活のリズムがなかなか整わず、朝起きられない、朝ご飯もきちんと食べてこない、登園・登所時間もばらばら、忘れ物も多いという四つがあったとします。どれも直してほしいことです。子どものためには保護者にも協力してもらって、早寝早起きできるようになってほしいし、朝ご飯もしっかり食べてきてほしい。できるだけ同じ時間に登園・登所して、活動に気持ちよく参加できるようになってほしい。もちろん忘れ物があると、園が困るのではなくて、子どもが活動に参加しにくくなるので、忘れ物もなく、きちんと活動に参加できるようになってほしい。四つとも直してほしいことです。

四つできていないぐらいですから、なかなか大変な状況です。良心的で一生涯懸命な保育者が陥りやすいパターンは、全て一度に言うことです。落ち着いて考えると、四つともできていない人が、四つ一度にできるわけがありません。

でも、保育者は四つ言ってしまうことがあります。結果、保護者はどれ一つできないので、保育者は全く努力してくれていないと思って、結局関係がうまくいきません。行く行くは四つとも子どものためには直してほしいことです。そのことは否定しませんが、大切なことだからといって、全然できていない保護者に四つ言って伝えることで、そのお母さんが意欲を持って自分でしようとするでしょうか。私たちはあるべき姿をついつい言ってしまうところがありますが、保護者自身が「やってみよう」「直さなくちゃ」「私にもできるかな」と思ってもらわなければできないわけです。

もう少しそこが分かっている保育者だと、この四つの中からいろいろ考えます。あのお母さんならこれはできるかなと思って、「せめて同じ時間にだけは連れてきて」と、四つの中で一番できそうなことを言います。でも、この四つの中から一つを言ったのは、先生が選んだ一つです。私は正直に四つ言えたいと思うのです。「お母さん、どれからだったらできる？」と聞くことが大事だと思います。「うーん」と考えて、消去法でもいいと思っています。その人にとって一番簡単そうなことでもいいのです。大事なのは、自分で選び取ったということです。「これだったらできるかも」と、その人がその問題に自分から向き合うことが大事です。先生に怒られたから嫌々やっているうちは、全く主体的になっていません。例えば「こんなことあるけど、お母さん、どれからだったらできる？」と、本人が向き合って選択することを大事にしたらいいと思うのです。

「うーん」と考えて、どれもできそうにないと思いつつ、「朝ご飯は連れてくる車の中でおにぎりを食べることになるかもしれないけれど、なるべく同じ時間には連れてくるようにする」と言ったとします。その人はそれが一番簡単だと思いました。それでいいのです。まずは一つ自分で選んで、自分が前向きに向き合える状態をつくるのが大事な支援です。私たちが代わりになることはできません。本人がどう取り組むかが大事なので、消去法でもいいから、一つでもまず手掛かりを本人と一緒に探すことが大事だと思います。

それで努力してくれた姿が見えたとき、ここにいる人はみんなきちんとお母さんのことを褒めると思います。「お母さん、最近、きちんと9時に連れてきてるね。頑張っているね」と言うでしょう。そこまですべて終わっているとすれば、「毎日同じ時間に来ると違う」「遅れてきた日は何か出にくそうにしていた



けど、毎日9時に来るようになってからは、自分から誘うようになったよ」ともう一声掛けるといいと思います。お母さんが頑張っていることを褒めるだけではなくて、お母さんの頑張りは大事なあなたのお子さんにこんなふうに反映されていて、それに応えて確実に子どもが変わってきている。ということも伝えます。その事実を通して、「嫌々だったかもしれないけれど、自分でやったことは悪くなかったのかな」と思って、「それだったら続けてみよう」というふうにつながると思うのです。

つつい私たちはこちらから向こうの状況をいろいろ考えて、与えることをしがちですが、大事なのは一緒に考えて、お母さん自身、お父さん自身が選び取って、自分自身が前向きに少しずつでも挑戦する気持ちになってもらうことだと思います。

乳児の保育をしているときは家庭も大変です。慣れない子育てに加えて、久々の職場復帰があったりして、現実にはとても大変な中で一生懸命やっている保護者に、「これだったらできるでしょ」と与えるのではなくて、「どれから一緒にやっていこうか」と本人の思いを聞きながら、本人の選択を促しながら、本人が一番取り組みやすいことを一緒に見つけるような話し合いができると、思いも聞いてもらえて、自分の決断になると思います。

乳児の保育は、決して園だけでは完結せず、家庭との連携がとても大事です。そして、乳児保育に携わる保育者はそのことの大切さを思うが故に、つつい保護者に強く要望したり、こんなことができて当たり前という立場で関わったりしがちです。そうではなくて、初めての子育てで大変だったり、職場復帰で忙しい思いをしたりする状況にも理解を示しながら、何からできるかを考え、その選択肢を本人のものとして取り組んだときに一緒に喜び、次につなげていく関係をつくることも、子どもたちが健やかに育つために重要なことだと思います。長時間ありがとうございました。